

所属・資格 ドイツ文学科・教授

申請者氏名 安達 信明

研究課題		<ul style="list-style-type: none"> 言語類型論とその関連領域の研究 近現代(19世紀・20世紀)のドイツ音楽劇研究
報告の概要	研究目的 および 研究概要	<p>言語学では、これまで通り言語類型論に注目して音韻論、形態論並びに統語論の各領域について考察を深めて行く。小規模言語も含めた現用言語の具体的資料に当たり、従来のアプローチの限界や問題点を更に明らかにして行く。</p> <p>音楽関係では、従来通り近過去の混迷の中で展開されたドイツ語圏の作曲家の手になるドイツ語による音楽劇を取り上げ、音楽史的偏差と作品の再評価の問題に加え、演出上の読み替えを巡る議論に取り組みつつ、これと関連する事項を資料で追いながら、併せて近現代という時代的文脈の中でその意味付けを洗い直す。</p>
	研究の結果	<p>先ず言語学関係では、大学行事と重なったことや両親が計6度にわたり入退院を繰り返すなどして、予定していた日本言語学会、日本独文学、日本ケルト学会には参加できなかったが、言語学会については予稿集を入手精読し、また各種文献調査・収集の他各個別研究会・報告会に出席し、類型論の可能性に関する事例を検討し、アマゾンの未知の部族と言語を巡る取扱いの問題など、理論と実際の整合性についての考察を深め、エスペラントについては最新の増補版を刊行することができた。音楽研究関係では、三年連続で日生劇場主催の「舞台フォーラム」(第25回)に参加し、また6年前からStanford大学のOperaGlass-ComposersやOperoneのデータベースを相互比較しながら、個別のデータファイルを作成する作業を進めているが、併せてIMSLPなどパブリックドメインのものや、欧文・和文の著作・論文など文献資料の他などの各種データを収集してこれを拡充し、日本初演の実際の舞台公演にも複数接し、更にネット上で公開されている音楽データの内容検討を並行して進めている。これにより従来の英語圏・ドイツ語圏に偏向しない多元的展望が具体的に得られつつある。</p>
	研究の考察・反省	<p>言語学関係では、類型論研究の方法として言語横断的ビッグデータ解析による「傾向のセット」からの脱出が重要だが、全体として基本的な枠組みの問題とその適用範囲を巡る問題とのトレードオフに帰着するケースが多く、個別言語特に危機言語については類型論的射程を持つデータベースやコーパスの作成そのものに現状ではまだ問題が多く、これを巡るテーマの論文化は今後の課題となった。音楽研究関係では、ファイルの拡充・整理・修正と内容検討は一定の範囲で進捗したが、資料の他個別対象による内容の粗密や不整合性も否定できず、まだ未消化の部分もあり、今年に入って父が4度目の入院で他界し残務処理に忙しく、メインPCが突然クラッシュしたこともあり、書きかけのままとなった論文による成果報告は次年度送りにせざるを得なかった。</p>
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所	<p>※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。</p> <p>(論文・著書) ※「コーパス言語学の新しい展開」日本大学人文科学研究所紀要第87号(共著), pp.49-108 (2014) ※「カレーの市民 —自己犠牲の憂鬱—」日本大学ドイツ文学論集第36号, pp.35-54 (2015) ※「鳥たち —不当に忘れられた作品—」日本大学ドイツ文学論集第37号, pp.17-46 (2016) ※「ニューエクスプレス・エスペラント語増補版」(白水社)(2018・10)</p>	
研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者		